在日日系ペルー人のアイデンティティと家庭内でのコミュニケーション

Identity and Family Communication of Japanese-Peruvians in Japan

後藤 ガブリエラ

GOTO Gabriela

510sg0405@gmail.com

Abstract

This study focuses on home education and identity of Japanese-Peruvians (Nikkei) living in Aichi Prefecture. It also shows what kind of bilingual education the Nikkei receive and what kind of barriers they and their parents have faced in order to be able to maintain Spanish as their heritage language. The heritage language plays an extremely essential role in developing their identity, and is indispensable to maintain a satisfactory domestic communication. Many researchers suggest that the loss of heritage language can cause communication problems with parents at home and the loss of their roots.

Investigating the connection between their identity and the home Spanish education that they are receiving, not only their real obstacles but also their real needs can be revealed. The results of the questionnaires and interviews surveys on this research clarify the needs of children and the desires and intentions of their parents. It also describes the current situation of how and why the children raised in Japan feel about their identity as a Nikkei.

Ⅰ．はじめに

日本において、日系人の親が日本語に堪能でない場合、家庭内でのコミュニケーションにおいて継承語はとても重要な役割を果たし、不可欠である。継承語が失われると、親とのコミュニケーションだけではなく、自分のルーツも失うことになると思われる。日本における継承語教育・バイリンガル教育は、容易なことではないが、不可能なことであるともいえない。中島（2001：54）は、「家で親が子どもの母語を意識して育てないと、社会性、情緒安定、知的な面での発達が遅れ、子どものことばの全体の発達が阻止されたり、遅れたりする。その上親子のコミュニケーションがうまく行かなくなり、アイデンティティの混乱が起こる」と提唱している。親が自信をもっている言語で子どもと会話をすることにより、信頼関係が築かれ、子どもの成長につながると思われる。

これまでに、日本に在住している外国籍・日系外国人の研究は多く存在しているが、日系ペルー人の言語やアイデンティティに関する研究はほとんどない。本研究は、日本で生まれたもしくは、幼少期に来日した日系ペルー人とその親を対象とし、継承語であるスペイン語がアイデンティティおよび家庭内コミュニケーションにどのような影響をもたらすのかを調査し分析する。

本論文は以下の構成となる。Ⅱ節では、ニューカマー来日の背景、継承語と母語の定義、日本における継承語とアイデンティティを概観する。続いて、Ⅲ節では、研究方法や対象者のプロフィールを紹介する。Ⅳ節とⅤ節では、アンケート調査及び聞き取り調査の結果や分析を示し、最後にⅥ節では考察まとめを付け加える。

Ⅱ．日本におけるニューカマーの背景

現在、日本には約293万人以上の外国人が暮らしており、その数は増加しつつある（法務省2020：3）。1986年の日本はバブル景気を迎え、労働力が不足していたため、この問題の対策方法として、1990年に「出入国管理及び難民認定法」が改正され、日系人とその配偶者や子どもにも定住を認めた。観光客としてではなく、定住者としての在留資格が認められた。対策の影響を受け、ニューカマーと呼ばれる日系南米人（本論文では、日系ブラジル人と日系ペルー人を指す）が急速に増加した。

両親の事情により日本へ来ることになったニューカマーの子どもは、母国との文化や言語の違いから不安を感じることがある。こういったケースの子どもの言語能力には、二つの段階があると言われている（多文化共生キーワード事典編集委員会2010：96）。一つ目は、日本語で流暢に会話ができるのに学校の成績が悪い。そして、二つ目は日本語が上達した代わりにスペイン語の能力が低下する。以上の二点の問題が段階として見受けられる

ため、教育や言語の面だけではなく、ひとり一人の子どもの心や自身を理解するためのアイデンティティのケアも非常に必要なことであるといえる。スペイン語力が低下することにより、家族の言うことをよく理解できないまた子どもが言いたいことは完全には伝わらないため、家庭内でのコミュニケーションに支障をきたすこともある。幼少期に内面的なサポートを受けられないと大人になっても不完全な日本語または、不自然なスペイン語しか話せない人になってしまう可能性があると考えられる。

1．継承語と母語について

母語は、自分のルーツを知り、自己アイデンティティを形成していく上で大きな役割を果す。母語とは人が成長していく過程において、母親や家族を通して最初に習得し、大人になってからも自由自在に話せる言語のことをさす。同義語で第一言語とも呼ばれる。日本で生まれ育った日本人にとっては、日本語が母語である。しかし、さまざまなルーツを持つニューカマーの子どもたちの場合、母語を特定することは難しいことである（中島2001：53）。

一方で、富山（2003:117）は母語の定義について、習得した順序以外に言語能力を考慮する場合があると述べている。これに従えば、「自分が最も話しやすい言語」として認めることも可能である。日本で生まれた日本人の子どもは家庭言語もコミュニティ言語も日本語であり、大人になるまで日本語を使用するため、必然的に日本語が母語かつ最も話しやすい言語となり変化することはない。親から学んだ言語が最も話しやすい言語になるとは限らない。子どもが育った環境によって、第一言語（L1[1)]）よりも第二言語（L2）だった言語が最も話しやすいことばとなり、第一言語つまり母語に変容することも考えられる（田中佑美・久津木文2015：115）。

継承語教育は、Heritage Language Educationの和訳だが、これまでにいくつかの定義がなされてきた（川岸2007：5）。継承語とは、祖先から受け継いだ言語で、祖父母や親から子どもたちに伝えることばをさす」（多文化共生キーワード事典編集委員会2010：103）。

現在では、世界中でこの用語が使用されており、2000年代前半から日本でも継承語や継承語教育ということばが定着しつつある。また、鈴木（2013:3–4）は、「継承語」と「現地語」を区別することは重要なことであると考えている。両親ともに日本語母語話者であり、学齢期を日本で過ごし、大人になってから外国語を学習する人の場合には継承語・現地語の概念は当てはまらない。一方で、日本生まれではあるが、親の都合で学齢期に海外へ移住した子どもや国際結婚の間に生まれた子どもの場合は、言語環境そしてエスニックルーツが異なるため、母語と外国語、または第一言語と第二言語だけでは説明するのは難しい

1）　本論文ではL1はFirst Languageを指し、L2はSecond Languageを指す。

ことである。生まれて初めて身につけたことばのことを母語と呼ぶことが多いが、家庭言語が社会で使われるマジョリティ言語と異なる環境で育った場合は、生まれて初めて身につけたことば、つまり親から教わったことばが必ずしも母語になるとは限らない。現地のことばが学習言語となると、親から受け継いだ言語「継承語」は弱くなると鈴木（2013：4）は主張している。

例えば、[2)]オールドカマーである一世または二世の在日コリアンにとっては、韓国語･朝鮮語が母語である。しかし、三世代以降にとっては日本語が母語となり、韓国語・朝鮮語は「継承語」になる。継承語は母語と異なり、意識的に学習し、身に付けなければならない場合もある。

2. 継承語とアイデンティティの関係性

Skutnabb-Kangas（1981：74–81）は、マイノリティ言語しか話せない子どもは、高度教育を受ける機会を逃してしまい、マジョリティ社会に同化しきれないため、常にマイノリティのもとで生きることになり、その状況から抜け出すことは不可能に近いと説明している。一方で、マジョリティ言語しか操れない子どもは、母文化やアイデンティティを失うことになりうる。母語がマジョリティ言語になると、価値観やアイデンティティもマジョリティ社会の人に近づき親から受け継ぐべきである文化がなくなってしまう。どちらのケースも危険で良い結果に繋がないため、両方の言語で教育を受けることは不可欠なことである。継承語は、親の言語であるため子どもがその言語が話せて当然である。継承語が話せなくなったり、忘れてしまったりすると親子ともに傷つく。そのため、継承語は伝承されるべきである（中島2003：5）。中島（2003：3）によると、外国語は学習者の選択であるが、継承語は親の選択であると主張している。

また、トロイツカヤ（2015：39）によると、アイデンティティは、複雑で重層性をもっている概念である。ここでは、トロイツカヤ（2015：39–43）が説明する個人的アイデンティティ、民族的アイデンティティ、言語的アイデンティティ、そしてバイリンガルとしてのアイデンティティの概念を紹介する。

(1)　個人的アイデンティティは、「自分の性格や能力は、他人とは異なる」という理解・意識であり、民族や社会によって影響されることはない。好みや才能を意味するため自己形成をするアイデンティティである。

(2)　民族的アイデンティティは、自分が所属するコミュニティの人と同じ価値観を持ち、感情を共有する意識である。また、民族的アイデンティティは、以下に説明する4つの

2)　オールドカマーとは、第二次世界大戦以前から日本に在住していた朝鮮半島、中国大陸そして台湾出身の人とその子孫のことである（金2011：59）。

発達段階に分けられる。

・段階1は、「無意識の段階」である。自分の民族的アイデンティティは、マイノリティに所属するアイデンティティとして意識していない。思春期前の子どもによく見られる段階である。

・段階2は、「民族的二重性の段階」である。自分の民族的アイデンティティや言語文化がどちらのアイデンティティに所属するのかを疑問に思い、アイデンティティを決め切れない段階である。10代から20代の若者に多く見られる。

・段階3は、「民族的アイデンティティの表出の段階」である。異なるタイプのコミュニティに参加することによって自分が所属する民族的アイデンティティを探る。

・段階4は、「民族的アイデンティティの結合の段階」である。自分はどちらの民族的アイデンティティに所属するのかを決める、ある程度安定した段階である。この段階に置かれる者は、周りの人々や出来事に影響されることは極めて低い。

バイリンガルの子どもに言語教育を行う際、上記の段階を考慮しながら指導することは重要である。子どもが所属している段階を把握していれば、次の段階へと導きやすくなるからである。また、伊藤・富永（2011：191）は、子どもが学校で使用する言語が彼らに強く影響し、学校で使う学習言語が第一言語となることが多い。その言語の国にアイデンティティが近づく傾向があると述べている。

(3)　言語的アイデンティティは、個人的アイデンティティ、民族的アイデンティティ、そして個人が他者とコミュニケーションをとる際に使用する言語や方言の関係性である。このタイプのアイデンティティは、個人と他者の両側によって決められる。バイリンガルは、さまざまな言語環境およびコミュニティを通して自分の言語アイデンティティを決めるため、言語アイデンティティは1つだけになるとは限らない。

(4)　バイリンガルとしてのアイデンティティは、幼少期から複数言語に触れられる言語環境に育ち、マイノリティ言語を使いながらマジョリティ言語を習得するアイデンティティのことである。子どもは、バイリンガルとしてのアイデンティティを意識することはあまりないが、成長するにつれだんだん強くなる。しかし、マジョリティ社会にマイノリティ言語が認められない場合は、バイリンガルとしてのアイデンティティを固めることは困難である。

（トロイツカヤ（2015：39–43）より作成）

Ⅲ．研究方法

本節では、対象者のプロフィール、アンケート調査、聞き取り調査について述べる。

1．プロフィール

以下の表は、子どもに該当する対象者Ⅰ（愛知県で生まれ育った日系ペルー人または、幼少期に来日した日系ペルー人）とその親である対象者Ⅱのアンケート調査の内容を基に作成された表である。

表1　対象者Ⅰのプロフィール

名　前（仮名）	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん
性　別	男子	女子	男子	男子
年　齢	15歳	13歳	17歳	26歳
国　籍	ペルー 日系4世	ペルー 日系4世	ペルー 日系4世	ペルー 日系4世
日本滞在歴	15年 （日本生まれ）	12年	14半年	17年
通信教育経験の有無	無	無	無	無
家庭内以外での 継承語教育の有無	無	無	無	無
家庭内の言語	スペイン語	スペイン語	スペイン語	日本語 スペイン語
本人にとって最も 話しやすい言語	日本語	日本語	日本語	日本語
家族以外の人と話す際に 使用する言語	日本語	日本語	日本語	日本語
自分のアイデンティティ： 日本人／ペルー人／その間	その間	その間	ペルー人 （多分）	その間

表2　対象者Ⅱのプロフィール

名　前（仮名）	Aさん母親	Bさん母親	Cさん母親	Dさん父親
性　別	女性	女性	女性	男性
年　齢	42歳	39歳	47歳	48歳
国　籍	ペルー	ペルー	ペルー （日系3世）	ペルー （日系3世）
日本滞在歴	18年	14年	27半年	18年
学　歴	大学中退	専門学校卒業	大学中退	高校卒業
現在の職業	製造業 （パート）	製造業 （正社員）	製造業 （パート）	自営業 （大工）
子どもと話す際に使う言語	スペイン語	スペイン語	スペイン語	スペイン語
日本語力	簡単な表現	簡単な表現	簡単な表現	日常会話と ビジネス レベルの間
スペイン語は大切である： そう思う／そう思わない	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う
子どもと話す際、 コミュニケーショントラブルの有無	有	有	時々	有

2. アンケート調査

(1) 対象者Ⅰには、日本語で書かれているアンケートⅠとアンケートⅡを記入してもらう。
(2) アンケートⅡでは、スペイン語と日本語で簡単な作文を書いてもらう。
(3) 対象者Ⅱには、子どもがこれまでに受けてきた教育や親としての願望についての対象者Ⅱ用のアンケートⅢを記入してもらう。

子どもが困る時、親にどのような助言を求め、どのようにコミュニケーションをとるのかを観察するために保護者も同席させた。スペイン語と日本語で簡単な作文を書いてもらう理由は、アンケートにおける自己評価とは異なる可能性を考慮したためである。

アンケートの質問項目は、他の調査で使用されたものを参考に、筆者が作成したものである。

3. 聞き取り調査

対象者Ⅰのアンケート結果を確認した後、彼らのアイデンティティをより深く追求するために改めて記載内容についての聞き取り調査を行う。また、対象者Ⅱにも同様の調査を行う。

Ⅳ. アンケート調査分析と結果

本節では、本論文の対象者に協力してもらったアンケート調査の内容の一部そしてデータ分析の結果を述べる。また、全ての協力者のスペイン語の作文課題の日本語訳は、該当者がスペイン語で書いたことに合うように、敢えて正しい表現や文法に直さないで日本語に訳したものになっている。

1. Aさんの記録

以下では、Aさんが記入したアンケート調査の内容の一部について述べる。

Q4. 「一番話しやすい言語」の質問に対し、Aさんは「日本語」と回答した。

Q10.「アイデンティティはどれに当てはまりますか」の質問に対し「c. その間」を選択し、下記のことを理由として挙げた。

「正直に言って、日本人と同じ感じが強い。ずっと日本に住んでいるからもう慣れた」

Q12.「スペイン語は大切だと思いますか」の質問に対し、「1. そう思う」を選択し、その理由として以下の回答を記入した。

「スペイン語は英語の次に有名な言語だと思います。だから、スペイン語を含めていろいろな言語を知っておくといい職につけると思う。スペイン語が話せる人はま

あまあいると思うので、助け合えると思う」

Q13.「スペイン語を話す際に困ることはありますか」に対し、「1. はい」を選択した。「親に通訳する時にスペイン語が出てこないときがある」と回答した。

Q18.「自分のアイデンティティは両親のアイデンティティとは異なると思いますか。どのように異なるのか説明してください」に対し、Aさんは「1. はい」を選択し、以下のように回答した。「母は、日本人のふるまいまあまできていると思うけど、日本語があまり話せない。父は、ふるまいは100％ペルー人の方。日本語は話せない。」と説明した。

アンケート調査Ⅱ（作文）の課題の回答は、以下の通りある。日本語版の作文のテーマは、将来の夢である。「ぼくは、将来、夢は世界のいろいろなことばを使う職に就きたいと思っています。ぼくは、小さい頃からいろいろな言語に触れ合う場で育って、それに慣れているので、そういう職に就きたいと思いました。自分の好きな英語を今ならっているんですけど、もともと小さい頃からしゃべっているスペイン語も使う職に就きたいです。」

スペイン語版の作文のテーマは、Mi comida favorita（好きな料理）である。

［A mi me gusta la comida “Ramen”. Porque a mi me gusta el sabor y el “Konbu”. Comiendo “Ramen” com “Chahan” es buenazo. Yo he ido a muchos restaurant para comer eso. Pero hasta ahora no he encontrado ninguno buen “Ramen”. justo ayer por internet he encontrado un buen restaurant. quiero ir rapido a comer.］

「私は、「ラーメン」料理が好き。私は、味と「昆布」が好きだから。「ラーメン」を「チャーハン」と食べているとめっちゃうまい。私は、それを食べるためにいろんなレストランに行ったことある。でも未だに良い「ラーメン」を見つけたことない。ちょうど昨日インターネットで良いレストランを見つけた。早く食べたい。」（和訳は筆者による。）

Aさんがアンケート調査ⅠとⅡに記入したことから日本語が最も話しやすいことばであることが窺える。また、日本語の読み書きは、同年齢の日本人の子どもと同じレベルであるが、スペイン語の読み書きの力に関しては同じとはいえない。スペイン語の作文の執筆中に母親にも筆者にも助言を求めることなく、時間はかかったものの自力で完成させることができた。スペイン語の作文課題の訳は、Aさんがスペイン語で書いたことに合うように、あえて日本語の正しい表現や文法に直さないでそのまま訳した。

2. Bさんの記録

以下では、Bさんが記入したアンケート調査の内容の一部について述べる。

Q4.　一番話しやすい言語　の質問に対し、Bさんは（　）の中に「日本語」と記入した。

Q10.「アイデンティティはどれに当てはまりますか」の質問に対し「c. その間」を選択した。その理由は、以下の通りである。

「日本語の方が話しやすい。スペイン語のほうが話しにくいし、つたえたいときへんなことばがでてしまうので日本語のほうが話しやすい。」

Q12.「スペイン語は大切だと思いますか」の質問に対し「1. そう思う」を選択し、その理由として以下の回答を記入した。

「私は、ペルーで生まれたのでペルーではスペイン語をはなすので自分の国だから大切だと思います。」

Q13.「スペイン語を話す際に困ることはありますか」に対し「1. はい」を選択した。

「てんこうせいでペルー人だとつうやくが要るので物のなまえをせつめいしてって言われるときはこまる。」

Q18.「自分のアイデンティティは両親のアイデンティティとは異なると思いますか」どのように異なるのか説明してください。に対しBさんは「1. はい」を選択し以下のように答えた。「私とお兄ちゃんは、日本語がたくさんしゃべれるけど、お母さんお父さんは、スペイン語しかはなせないのでちがうと思う時がある。」と説明した。

アンケート調査Ⅱ（作文）の課題の回答は、以下の通りある。日本語版の作文のテーマは、将来の夢である。

「私は、大きくなったらパティシエになりたいので、家でフランス語をれんしゅうしています。たくさん話せるのは難しいけど、がんばっています。フランス語は、むずかしいけど、れんしゅうして話せるようになっています。私はパティシエでお兄ちゃんはシェフになっています。」

スペイン語の作文のテーマは、Mi comida favorita（好きな料理）である。

［Mi comida favorita es la pollo frito por ke es corocante y su sabor］

「私の好きな料理は、チキンフライサクサクしているとその味だから。」

Bさんがアンケート調査ⅠとⅡに記入したことから日本語が最も話しやすいであることがわかる。また、日本語の読み能力は、同年齢の日本人の子どもと同じレベルではあるが、作文中に漢字を使った回数は少なく、筆者に何度も助言を求めたため、書く能力も中学1年生と同様のレベルに達しているとは言い難い。

スペイン語の書く能力に関しても問題があると考えられる。スペイン語の作文の執筆中に隣に座っていた母親にスペイン語の単語の綴りを何度も確認した。助けを求められた母親は一つ一つの文字を教えたのにもかかわらずBさんは、正しいスペイン語を書くことはできなかった。

3. Cさんの記録

以下では、Cさんが記入したアンケート調査の内容の一部について述べる。

Q4. 一番話しやすい言語の質問に対し、Cさんは（　）の中に「日本語」と記入した。

Q10.「アイデンティティはどれに当てはまりますか」の質問に対し、「b. ペルー人」を選択した。その理由は、以下の通りである。

「ペルー人を選んだけど、よくわからない。国籍は日本国籍じゃないので、日本人じゃないと思うけど、ふるまいとか考え方とかはペルー人じゃない。家族は、みんなペルー人だから俺もアイデンティティはペルーかもしれない。」

Q12. スペイン語は大切だと思いますか。の質問に対し「1. そう思う」を選択し、その理由として以下の回答を記入した。「母国のことばだから」

Q13.「スペイン語を話す際に困ることはありますか」に対し、「1. いいえ」を選択した。

Q18.「自分のアイデンティティは両親のアイデンティティとは異なると思いますか」どのように異なるのか説明してください。に対しcさんは「1. はい」を選択し以下のように答えた。「俺は日本に住んでいるのが長いから日本人と同じ考えになった。」と説明した。

子ども用アンケート調査Ⅱ（作文）の課題の回答は、以下の通りある。日本語版の作文のテーマは、趣味である。

「自分の趣味は、スポーツをすることです。簡単に言えば、体を動かすことが、自分は好きだからそれが趣味になっているんだと思います。自分は、スポーツをやれば、人並み以上に出来たので、とてもスポーツをすることが楽しいと思います。だから、自分は、スポーツ（体を動かす）ことが趣味になっているんだと思います。」

スペイン語の作文のテーマは、Mi pasatiempo（趣味）である。

［A mí me gusta hacer deporte, estar en actividad por que algo saludable, al practicar mi deporte favorito lo hago sin ningún dificultad, Es algo que me gusta hacerlo bien es por eso que lo denomino mi pasatiempo.］

「私は、スポーツをするのが好きです。体を動かすことは健康的。好きなスポーツをする時、問題なくプレーすることができます。しっかりこなすが好きひとつのことである。だから、それは自分の趣味だと思います。」

Cさんがアンケート調査ⅠとⅡに記入したことから日本語が最も話しやすいことばであることがわかる。また、日本語の読み書きの能力は、高校3年の日本人学生と同じレベルであるといえる。しかし、スペイン語の書く能力に関しては同じことはいえない。スペイン語の作文の執筆中に母親に助言を求めることはなかったものアンケート用紙の裏にスペイン語の綴りを数回確認してから課題の最終版を記入する様子が見られた。

また、アイデンティティは「c. その間」ではなく、「b. ペルー人」を選んだ点は、非常に興味深い。

4. Dさんの記録

以下では、Dさんが記入したアンケート調査の内容の一部について述べる。

Q4. 一番話しやすい言語　の質問に対し、Dさんは（　）の中に「日本語」と記入した。

Q10. アイデンティティはどれに当てはまりますか。　の質問に対し「c. その間」を選択した。その理由は、以下の通りである。

「僕は、ペルーで生まれ、小学校4年生の時に来日したので、アイデンティティは完全な日本人ではないと思います。かといって、100％ペルー人でもないと思います。実の母は、ペルー人だが9歳から育ててくれた母親は日本人であるため、日本人や日本で育った人と一緒にいる時の方が落ち着きます。」

Q12. スペイン語は大切だと思いますか。の質問に対し「1. そう思う」を選択し、その理由として以下の回答を記入した。「ペルーから日本に来たときは、スペイン語を話すことはできたけど、上で述べたようにスペイン語が話せない日本人の母親によって育てられたため、スペイン語は徐々に弱くなっていった。大学生になってからはスペイン語を学ぶためにスペインに留学したけど、小さい頃にスペイン語を維持していればお金も時間も節約できたと思います。」

Q13. スペイン語を話す際に困ることはありますか。に対し「1. はい」を選択した。

「話す前に、頭の中で単語や文法を考えてから話している。ことばがなかなか出てこない。」

Q18. 自分のアイデンティティは両親のアイデンティティとは異なると思いますか。どのように異なるのか説明してください。に対しDさんは「1. はい」を選択し以下のように答えた。「父親は、日本人女性と結婚してから日本語が上手くなったし、日本の文化やマナーも守るようになった。しかし、それは大人になってから身に着けたアイデンティティであり、僕のように自然と身についたものではない。」と説明した。

アンケート調査Ⅱ（作文）の課題の回答は、以下の通りある。日本語版の作文のテーマは、好きな食べ物である。

「僕の一番好きな食べ物は、天ぷらです。天ぷらの中では、特にとり天が大好きです。日本に来て、初めて食べた日本料理が天ぷらなので、思い出の料理でもあります。今は、就職で高知に住んでいますが、地元の蒲郡に帰る時は家族でおばあちゃんが経営しているお店でおいしい天ぷらを食べます。これからもたくさん天ぷらを食べて幸せになりたいです。」

スペイン語の作文のテーマは、Mi pasatiempo（趣味）である。

［Mi pasatiempo es correr para marason. Yo me gusta correr marason en Verano con mis amigos todos. Cuando corre siente aire fresco es bueno en la cara. Yo córro todos las mañanas cerca la casa una hora. Ese es mi pasatiempo.］

「私の趣味はマラソンのために走ることです。私好きマラソンを走るみんな友達と一緒

に。走る時きれいな空気感じる顔には良いことです。私は、毎朝家の近くで一時間走る。それが、私の趣味です。」

Dさんがアンケート調査ⅠとⅡに記入したことから日本語が圧倒的に最も話しやすいことばであることが明らかになった。また、日本語の読み書き能力は、日本語母語話者レベルと変わらないこともいえる。

一方で、スペイン語の読み書き能力に関しては、ネイティブレベルからかなり遠い位置にある。作文を書いている途中で父親に日本語で一度だけ助けを求めることはあった。

作文の内容から判断すると、対象者の中で日本語能力が最も高いと思われるのはDさんである。

Ⅴ．対象者Ⅰの聞き取り調査

以下には、全ての対象者Ⅰの聞き取り調査を行った際の内容の一部について述べる。

Aさんは、両親に伝えたいことが伝わらない場合は、自動翻訳を用いることで伝えたい内容を日本語からスペイン語へ翻訳し、両親に画面を見せることでコミュニケーションを取っているようだ。Aさんは、英語のみならず、スペイン語と同じくラテン語の派生であるフランス語や日本語と同じくアジア圏の韓国語にとても興味を示している。現在、関心を持っている言語を学習するため、大学へ進学するという目標を持っている。筆者の指導の下、週に1回（毎2時間）最も得意な科目である英語に一生懸命に取り組んだことにより、英語実用能力試験3級（現在は準2級を勉強中である）を取得することに成功した。非常に向上心が高く、日常的なレベルのコミュニケーションであれば、ある程度スペイン語が話せることがAさんの自信になっているといえる。

Bさんの場合は、自身がどちらのアイデンティティに所属するのかをよく分かっていないといえよう。両親はペルー人であり、両親との会話はスペイン語であることから、どちらかといえばペルー人側が強いのかもしれないと本人は説明した。しかし、アンケート調査の課題にて作文をスペイン語で書いた際、自力で文章を作成し完成することは出来なかった。作成途中の段階で、母親に手伝ってもらうことで何とか文章を完成することができた。一方で、作文を日本語で書いた際は、スペイン語の作文の時とは違い、母親や筆者に助けを一切求めることはなかった。作文内容に関しても、年齢相応の日本語を使用した。

Cさんは、日本へ移住したのは、彼女が3歳の時だった。移住後、保育園から高校3年生（現在）に至るまで日本の学校に通ったため、日本語が最も流暢にコミュニケーションが取れる言語である。母親と4つ年上の兄と3人で生活していたが、2年前に兄が結婚し愛知県から離れため、現在は母親と2人で生活をしている。幼少期より家にいる時間は、スペイン語で会話をしなければならないという家族内のルールが設定されているため、家庭内言

語はスペイン語となっている。

最後は、アイデンティティが最もはっきりしていると考えられるDさんの状況について供述する。Dさんにとっては、圧倒的に日本語が最も会話がしやすい言語となっている。これに対し、スペイン語は日常会話程度であれば、多少の文法的困難はあるが大きな問題は無い。しかし、実際問題として言葉を発する前は一旦、脳内にて文法を意識しスペイン語での文を構成した後に会話をするのが悩みであるようだ。

来日する1年前に両親は離婚した。日本で出稼ぎ労働者として働いていた父親は日本人女性と再婚した。その翌年にDさんは、来日し父親と再婚した女性の戸籍に入り、名前や家庭内で使用する言語が一瞬で変わった。日本人の子ども同然として育てられたため、日系ペルー人コミュニティとの関わりがなくなり、その結果スペイン語に触れる機会は激減したと考えられる。

1．対象者Ⅱ聞き取り調査

以下には、全ての対象者Ⅱの聞き取り調査を行った際の内容の一部について述べる。

(1) Aさんの家庭の中では、親子間でのコミュニケーショントラブルが生まれないよう、幼少期からAさんにスペイン語を身につけて欲しかったと母親は発言した。両親はスペイン語を教える正しいメソッドを把握していないため、Aさんが小学生になった年にスペイン語が学べる語学学校に通わせることを検討していた。しかし、スペイン語を外国語としてではなく、母語として身につけて欲しかったため子どもを語学学校に通わせることを断念した。最終的には、家庭内のみでしかスペイン語を学習しなかったため、第2節で前述したケースのように、綺麗なスペイン語であるとは言えない日常会話程度のスペイン語しか話せないまま成長した。長時間（1時間以上）スペイン語を話すことが求められる場合、途中から無意識に日本語が混入してしまうことが多々あり、親子間でのコミュニケーションが困難になると母親が述べた。「蒲郡市において、大学に進学する学生の割合は日系ペルー人より日系ブラジル人の方が圧倒的に高いことは、非常に残念なことである。日系ペルー人の親は向上心が低く、子どもの教育にお金をかけることは少ない。その理由から日系ブラジル人に比べ、高校や大学に進学する生徒は少ないのは保護者の責任である。日系ペルー人の親は言語や文化の壁が大きいからこそ、子どものためにより強くならなければならない。保護者のサポートが無い子どもが高度教育を受けることは、不可能に近いことである。」と母親は説明した。

上記の話の裏付けとして、母親は勉強面で子どもをサポートしてくれる塾や家庭教師の力を借りている点が上げられる。また、自身の子どもとバックグラウンドが似ている日系ペルー人の先生（筆者）に英語科目の指導依頼も行なっている。筆者も母親と同じ言語でコミュニケーションがとれるため、子どもの学習状況や進学の相談などについて気軽に気

になることを確認することが出来る。学習の具体的な状況まで共有してもらえることから安心して指導を依頼することが出来ると発言した。筆者が教育指導を行なっているAさんも自身と同じような経験をしていることから協力者に安心感を与えることが出来るということが分かった。Aさんは、スペイン語を学習しながら楽しく英語も学ぶことが出来る利点を感じていると母親に言っているようだ。

(2) Bさんの母親は、Bさんを出産した直後に来日した。3人の子どもがいて、家の近くの工場にて週に5回勤務をしている。日本で育っているBさんに日本語だけではなく、親の言語であるスペイン語も使いこなせるようになって欲しいという願いを抱いている。「蒲郡には、日本語教育を必要としている子どもに焦点を当てる研究や彼らの教育をサポートする市役所の支援者はたくさんいる。しかし、Bさんのように日本語教育ではなくスペイン語教育も必要としている子どもに教育サポートを提供している専門家はいない。周りにサポートをしてくれる人がいないため、自分自身でスペイン語を教える決意をした。ペルーに在住しているBさんの祖父母に小学生向けの国語や社会の参考書を3冊か送ってもらったけれど、スペイン語が話せない子どもにどのようにことばを教えれば良いのかわからないという大きな壁にぶつかった。」とBさんの母親が発言した。

約一ヶ月間、簡単な言葉でスペイン語のアルファベットや基本的な文法を教えようと試みたが、正しい教授法がわからなく、また子どもも全く興味を示さなかったため、断念した。それ以降、スペイン語の読み書きは出来なくても、少なくとも話せるようになって欲しいと思い、Bさんと話す時は、積極的にスペイン語のみで話す方向にスイッチした。

(3) Cさんの親は、Bさんの母親と同じ工場に勤めている。シングルマザーであり、女性ひとりで大学に進学したいという目標を抱いているCさんを支えている。保育園時代から高校時代（現在、高校第3学年に在学中）まで、通信教育や正式なスペイン語教育を一切受けずに、日本の学校に通っているCさんのスペイン語の話す能力は中級であると母親は説明した。「Cさんには、将来私のように工場ではなく、ちゃんとしたグローバル的な職に就いて欲しいので、幼少期から我流ではあるが、スペイン語を教えている。蒲郡には、スペイン語を学びたい、または保持したい子どものための支援はないと言っても過言ではない。私は、完璧な日本語を話すことはできないが、子どもはしっかりとコミュニケーションがとれるように日々勉強しています。ただ、ことばをごちゃ混ぜにすると悪影響を与えると聞いたことがあるので、ことばを分けて話すことを心掛けている。」とCさんの母親が、Cさんがこれまでに受けてきたスペイン語教育について述べた。

(4) Dさんの父親は、Aさん、Bさん、またCさんの親とは異なり、配偶者が日本人であるため、家庭内言語も生活言語も日本語である。再婚した翌年より大工の自営業をしており、早朝に出勤し、夜の21時以降に帰宅するため、Dさんの教育はすべて日本人の妻に任せたとのこと。「昔から家庭を支えるのは、私一人だけだから、常に子どもと一緒にいるの

は難しかった。幼い子どもにとって、母親は特別な存在だからDさんの教育を奥さんに任せたら、数年後にはDさんの日本語力は驚くほど良くなった。一方で、もともと話すことができたスペイン語力は徐々に低下していった。父親のことばを忘れて欲しくなかったので、積極的にスペイン語で会話しようとしてみたが、Dさんは私が尋ねたことに対してスペイン語ではなく、いつの間にかすべて日本語で答えるようになった」と父親は語った。

前述した出来事の後、Dさんを豊橋市にあるスペイン語が学べる語学学校に通わせようとしたが、妻に必要ないと反対され、語学学校の代わりに一般的な進学塾に入学させることにした。当時、近所に同じようなケースの子どもにスペイン語を教えてくれる施設を知っていれば、子どもと一緒に積極的に参加していた可能性が高いとDさんの父親は発言した。

1．調査結果の分析：言語とアイデンティティの関係性

下記には、言語とアイデンティティ形成の観点から考えた調査結果の分析をまとめる。アンケート調査Ⅰの「Q10．アイデンティティはどれに当てはまりますか。」の質問に対し、4名のうちの3名は「c．その間」を選択し、1名だけが「b．ペルー人」を選択した。以下にそれぞれの対象者Ⅰの回答の一部を記載する。

(1) Aさん：「正直に言って、日本人と同じ感じが強い。ずっと日本に住んでいるからもう慣れた」

(2) Bさん：「日本語の方が話しやすい。スペイン語のほうが話しにくいし、つたえたいときへんなことばがでてしまうので日本語のほうが話しやすい。」

(3) Cさん：「ペルー人を選んだけど、よくわからない。国籍は日本国籍じゃないので、日本人じゃないと思うけど、ふるまいとか考え方とかはペルー人じゃない。家族は、みんなペルー人だから俺もアイデンティティはペルーかもしれない。」

(4) Dさん：「僕は、ペルーで生まれ、小学校4年生の時に来日したので、アイデンティティ完全な日本人ではないと思います。かといって、100％ペルー人でもないと思います。実の母は、ペルー人だが9歳から育ててくれた母親は日本人であるため、日本人や日本で育った人と一緒にいる時の方が落ち着きます。」

Aさんがアンケート用紙に記入したように、生まれてからずっと日本にいるため、考え方やアイデンティティは日本人の方に近いといえる。聞き取り調査の結果を見る限り、Aさんは自身のことを完全日本人として認識していない。しかし、自身のアイデンティティは日系ペルー人コミュニティのメンバーや親のアイデンティティとも異なるため、その間に所属していると本人は説明している。

聞き取り調査では、Bさんはどちらのアイデンティティに所属するのかをよく分かっていないことが窺える。両親はペルー人であり、両親との会話はスペイン語であることから、

どちらかといえばペルー人側が強いのかもしれないが、大人のペルー人と比較すれば自分のふるまいや考え方は、日本人に近いので二つのアイデンティティのミックスになっていると本人は述べている。

また、ペルーで生まれ9歳の年齢で来日したDさんは、父親が再婚した日本人女性に日本人の子ども同然として育てられたため、日系ペルー人コミュニティとの関わりがなくなり、スペイン語に触れる機会は激減した。しかし、本人の言及によるとペルーにルーツがあることを誇りに思っているため、完全な日本人ではないと本人は主張している。

アイデンティティとして「b. ペルー人」を選択した唯一の対象者のCさんは、自分が所属するアイデンティティをよくわかっていないようだ。しかし、「Q10.」に記入した理由から判断すると、Cさんはアイデンティティを自身そして親の国籍を基に決めているのではないかと考えられる。また、他の対象者と同様にふるまいや考え方などは日本人に近いと述べているということから、アイデンティティはその間に当てはまる可能性が高いと筆者は考える。

また、2項で言及した、トロイツカヤ（2015：39–43）が提唱した民族アイデンティティ概念の段階にそれぞれの対象者Ⅰを当てはめてみた結果、次の通りになった。

Aさん、Bさん、Cさんは、自分自身が所属するアイデンティティを決め切れていないため、段階2の「民族的二重性の段階」に所属するといえる。そして、数年前に社会人になり、様々な人々と交流を深めてきたDさんは、段階4の「民族的アイデンティティの結合の段階」に所属すると筆者は考える。

また、対象者Ⅱは、スペイン語の教育および継承についての意見は以下の通りである。

「Q11. 子ども達がスペイン語を話すことは大切なことだと思いますか。」の質問に対し、対象者Ⅱであるすべての親は、「はい」を選択した。その理由として以下の回答が明らかになった。

(1) Aさんの親：「日本生まれであっても、ルーツはペルーにあるしスペイン語は、親のことばであるため、スペイン語教育はとても大切なことだと思います。」

(2) Bさんの親：「・親の母語であるから、・学習意欲が高まるから、・家族とのコミュニケーションがよくなるから」

(3) Cさんの親：「親の母語であるから。また、将来、ペルーに帰国する可能性はゼロではないため、人に頼らないで自力で生活できるよう、スペイン語を学ばせる必要があると思います。さらに、スペイン語が話せると、私たちのように日本に在住している他の日系ペルー人とも仲良くできると思います。」

(4) Dさんの親：「子どもが小さかった頃に、しっかりしたスペイン語教育を受けさせていれば、今現在、片言なスペイン語ではなく流暢なスペイン語を話すことができたと思います。ことばは、子どもにとって、将来に役立つ財産で

あると思います。」

上記の回答から判断すると、対象者Ⅱにとってはスペイン語教育また、継承はとても重要なものとして見なされているといえるでしょう。

また、アンケート調査Ⅱのスペイン語と日本語で作文を書く課題の結果から判断すると、スペイン語は継承されているといえる。しかし、話す能力と読み書き能力における差は大きかった。対象者Ⅱは、対象者Ⅰが幼少期の段階から自分の母語であるスペイン語で子どもに話しかけることが多いため、子どもの聞く能力・話す能力は高いレベルに達していると考えらえる。しかし、正しい教授方法を駆使し、子どもにスペイン語の文法や文字を教えることができる親が少ないため、読み書きの能力は低いということが明らかになった。

さらに、スペイン語の保持の手助けになる対策も幾つか見受けられた。例えば、Cさんの親の場合は、幼少期から家にいる時間は、スペイン語だけで会話する家族内のルールを設定し、家庭内言語を完全にスペイン語とする。両言語を混ぜて話すと子どもは混乱してしまうため、言語ミックスはなるべく避けて、コミュニケーションをとるようにしていると発言した。

Aさんの場合は、日系ペルー人である子どもとバックグラウンドが似ている日系ペルー人の先生（筆者）に英語科目の指導依頼などの対策も行なっている。筆者も母親と同じ言語でコミュニケーションがとれるため、子どもの学習状況や進学の相談などについて聞けるとともに、英語学習を通して子どもにスペイン語の重要性を伝えてもらえるといった利点が感じられる。

Ⅵ. 考察とまとめ

本節では、本論文のまとめについて述べる。本論文で紹介した母語・継承語、バイリンガリズムおよびアイデンティティの定義をめぐる先行研究は世界中で多数見られ、日本におけるニューカマーの継承語やバイリンガルに関する研究も近年徐々に増え続けている。しかし、Ⅱ節で先述した通り、日本におけるバイリンガル教育において、まだ解明されていない分野・問題は多く存在するといえる。

本研究の調査結果からすべての対象者Ⅱがスペイン語を保持・伸張するためには、子どもにスペイン語の参考書を購入し、親が身に付いている知識やスキルでできる範囲でベストを尽くし子どもと一緒に勉強しているということが明らかになった。また、本研究に協力してくださった対象者Ⅱの共通点として、「子どもに高等教育を受けて欲しい、そして日本人と日系ペルー人が共存している社会で活躍して欲しい」という強い願望を抱いている点が上げられる。子どもに低学年の頃から家庭内外でしっかりしたスペイン語教育を与えることができれば、より健全な家庭内コミュニケーションが気づかれる可能性があるとい

える。

今後、増え続けていくであろうマイノリティのバイリンガルの子どもの教育の言語サポートだけではなく、本論文の後半で取り上げられた個人のアイデンティティ形成と深く関連している家庭内でコミュニケーショントラブルにも目を向ける必要性があると考えられる。これからは日系ペルー人の子どもやその親の状況だけでなく、大人の日系ペルー人を主なターゲットにし研究を続けていきたいと考えている。

参考文献

川岸麻里子　(2008)「継承語教育の可能性に関する考察：外国につながる子ども達のために」卒業論文，慶応義塾大学.

鈴木崇夫　(2013)「言語的マイノリティ児童の学習言語（英語・継承語）を育てるカナダの公立小学校の実態：エスニック・マイノリティの活力、児童の心理的要因、バイリンガル作文力に焦点をあてて」博士論文，名古屋外国語大学.

田中佑美・久津木文　(2015)「イマージョン教育を受ける児童のバイリンガリズムとその規定要因」『広島経済大学研究論集』37（4）：113–125.

多文化共生キーワード事典編集委員会（編）（2010）『多文化共生キーワード事典』改訂版　東京：明石書店.

トロイツカヤ・ナターリヤ　(2014)「バイリンガル・継承語教育を援用した学習支援の可能性：地域教室に通う日系ペルー人の子どもを対象とした実践を通して」『早稲田日本語教育学』14–16：117–136.

――――　(2015)「日系ペルー人児童の複言語能力とアイデンティティに関する一考察：日本語教育とバイリンガル継承語教育の観点の融合を目指して」博士論文，早稲田大学.

富山真知子　(2003)「第1言語と母語」小池生夫（主編）『応用言語学事典』117.　東京：研究社.

Skutnabb-Kangas, Tove (1981) Bilingualism or not: The education of minorities. Clevedon: Multilingual Matters.

中島和子（2001）『バイリンガル教育の方法：12歳までに親と教師ができること』増補改訂版　東京：アルク.

――――（2003）「JHL の枠組みと課題：JSL ／ JFL とどう違うか」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』プレ創刊号：1–15.

法務省（2021）「令和元年末現在における在留外国人数について」令和2年03月27日
http://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04_00003.html（閲覧日2021／07／01）